

「義の奴隷」

1. はじめに

(1) 「義認」を終えて、「聖化」に入った(6:1~8:17)。

(2) 聖書が教える「救い」の全体像

①義認：過去形の救い。一度限りの出来事。

②聖化：現在進行形の救い。

③栄化：未来形の救い。

(3) 前回の内容：「聖化の土台：キリストとの一体化」

①質問「恵みが増し加わるために、罪の中にとどまるべきか」

②回答：私たちは罪に対して死んだ。

キリストに起こったことは私たちに起こった。

私たちは、キリストとともに死に、葬られ、復活した。

2. メッセージのアウトライン

(1) 第2の質問(15節)

(2) 回答：奴隷の例話(16~22節)

(3) まとめ(23節)

3. メッセージのゴール

(1) 無律法主義(Antinomianism)

(2) 聖化の速度

このメッセージは、聖化の原理について学ぼうとするものである。

I. 予想される第2の質問(15節)

1. 15節

「それではどうなのでしょう。私たちは、律法の下にではなく、恵みの中にあるのだから罪を犯そう、ということになるのでしょうか」

(1) 1節との比較

「それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中

にとどまるべきでしょうか」

①ともに修辭的質問である。

②動詞の時制が異なる。

*1節は、現在形。継続した動作。つまり、習慣的に罪を犯し続けること。

*15節は、アオリスト形。時々罪を犯すこと。

(2) この質問の背景にある論理

①律法の下にいれば裁きが恐ろしい。

②今は恵みによって赦されるのだから、時々罪を犯してもよいではないか。

(3) パウロの論理

①「罪が増せば、恵みも増す」という真理は否定していない。

②「信者は律法の下にではなく、恵みの下にいる」という真理も否定していない。

③彼が否定しているのは、恵みを放縱な生き方をする口実にすること。

2. 「絶対にそんなことはありません」

(1) 最も強い否定形(メイ・ゲノイト)

①ロマ3:4、6、31、6:2にすでに出て来た。

(2) パウロは、第1の質問も、第2の質問も、強く否定する。

II. 回答: 例話(16~22節)

1. 19節

「あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています」

(1) 肉の弱さとは、靈的理解力が欠如していること。

①本来なら、靈的話題だけを取り上げて説明すべきところである。

②ローマのクリスチャンたちは、まだ靈的に成熟していない。

(2) 人間的な言い方をすると、例話を用いるということである。

①例話は、当然、聞き手が熟知しているものでなければならない。

②聖書から実例を引用して例話とすることの当否。

③2列18:4

「彼は高き所を取り除き、石の柱を打ちこわし、アシェラ像を切り倒し、モーセ

の作った青銅の蛇を打ち砕いた。そのころまでイスラエル人は、これに香をたいていたからである。これはネフシュタンと呼ばれていた」

(3) パウロが用いている例話は、奴隷と主人の関係である。

①今の私たちには、分かりにくい。

②ローマ時代の人たちには常識である。

*当時の都市生活者の多くが、借金のために自分を奴隷に売った。

*これは、意志に反して奴隷になっている人である。

*自発的に奴隷になっている人もいる。

*ともに、主人には絶対服従である。

*ただし、この時代の奴隷は、アメリカ南部での奴隷のようにではない。

*コリントの町の人口の3分の1が奴隷であったと言われている。

③今の時代の人に分かるように、私は「DV状況にある夫婦関係」を例話とした。

2. 16節

「あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです」

(1) 「あなたがたはこのことを知らないのですか」

①当然知っているはずだ。

(2) 人間には、完全な自立はあり得ない。

①未信者は、クリスチャンになると不自由になると誤解している。

②人間は、誰か(何か)に仕える必要がある。

③イエスの教え。マタ6:24

「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません」

④ヨシ24:15

「もしも【主】に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、川の向こうにいたあなたがたの先祖たちが仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のエモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、【主】に仕える」

(3) 主人は2人いる。

- ①罪という主人の奴隷となるなら、死に至る。
 - *これは不従順の道である。
 - *「死」とは、神からの分離(霊的死)のことである。
- ②キリストという主人の奴隷になるなら、義に至る。
 - *これは従順の道である。
 - *「義」とは、永遠のいのちである。
- ③主人を変えると、劇的な変化が起こる。

3. 17~18節

「神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです」

(1) 私たちが置かれている状態の説明

- ①かつての姿：罪の奴隷
- ②今の姿：自発的に義の奴隷になった。
 - *この状態を日々実践する。

(2) 今の状態は、「伝えられた教えの規準に心から服従し」たから与えられた。

- ①「伝えられた教えの規準を受け入れ」(新共同訳)
- ②「伝えられた教の基準に心から服従して」(口語訳)

(3) 訳語の問題

- ①「教えの規準」が私たちに伝えられた(委ねられた)のではない。
- ②私たちが、「教えの規準」に委ねられたのである。主客が転倒してはならない。
- ③神のことは永遠に変わらず、私たちを救う力がある。

(4) 「規準」という言葉について

- ①「教え」とは、福音のことであり、キリストとの一体化のことである。
- ②「規準」とは、ギリシア語で「トゥポス」という。

(5) 「トゥポス」の使用例

- ①ヨハ20:25(衝撃を受けた痕跡)

「それで、ほかの弟子たちが彼に『私たちは主を見た』と言った。しかし、トマスは彼らに『私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません』と言った」
- ②使7:43(偶像。型に入れて作られた物)

「あなたがたは、モロクの幕屋とロンパの神の星をかついでいた。それらは、あなたがたが拝むために作った偶像ではないか。それゆえ、わたしは、あなたがたをバビロンのかなたへ移す」

③使7:44 (神から示された型)

「私たちの父祖たちのためには、荒野にあかしの幕屋がありました。それは、見たとおりの形に造れとモーセに言われた方の命令どおりに、造られていました」

*ヘブ8:5 参照

④使23:25 (文章の要約)

「そして、次のような文面の手紙を書いた」

⑤ロマ5:14 (予表。予型)

「ところが死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。アダムはきたるべき方のひな型です」

⑥ピリ3:17 (手本。模範)

「兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください」

*1テサ1:7、2テサ3:9、1テモ4:12、テト2:7、1ペテ5:3など参照

(4) 私たちが受け入れた教えには力がある。

①福音の3要素

②キリストとの一体化

*キリストにあつて死に、葬られ、キリストにあつて生かされている。

③この教えの本質

*神からの型であり、模範である。

*私たちの人格に衝撃を与え、私たちをキリストに似た者に変える力である。

4. 19~22節

「あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです」

(1) 以前：罪の奴隷として自分の手足を汚れにささげていた。

①それ以外の選択肢はなかった。

- ②その結果、今では恥じているようなことをしてきた。
- ③終着点は、死である(霊的死)。

(2) 今: 自発的に義の奴隷(神の奴隷)となり、聖潔に進むべきである。

- ①罪から自由になったという前提がある。
- ②聖潔に至る実を得た。
- ③終着点は、永遠のいのちである。

III. まとめ(23節)

1. 23節

「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」

(1) かつての私たちは、罪の奴隷であった。

- ①罪が主人である。
- ②主人から報酬が来る。それが死である。
- ③当然の報いである。
- ④ギリシア語で「オプソウニオン」である。
- ⑤将軍が兵士に支払う給与である。
- ⑥毎日支払われる。

(2) 今の私たちは、キリストの内にある。

- ①キリストが主人である。
- ②主人から賜物が与えられる。それが永遠のいのちである。
- ③賜物は、報酬ではない。
- ④ギリシア語で「カリスマ」である。

(3) 以上のことが、神が創造した世界にある霊的法則である。

結論:

1. 無律法主義(Antinomianism)

(1) パウロに対する非難(ガラ5:13)

「兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自

由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい」

(2) ペテロに対する非難 (1ペテ2:16)

「あなたがたは自由人として行動しなさい。その自由を、悪の口実に用いないで、神の奴隷として用いなさい」

(3) ユダに対する非難 (ユダ4)

「というのは、ある人々が、ひそかに忍び込んで来たからです。彼らは、このようなさばきに会うと昔から前もってしるされている人々で、不敬虔な者であり、私たちの神の恵みを放縱に変えて、私たちの唯一の支配者であり主であるイエス・キリストを否定する人たちです」

2. 聖化の速度

(1) クリスチャンの祝福

- ①一度キリストを信じたなら、救いを失うことはない。
- ②永遠のいのちが保障されている。
- ③聖化の完成も保障されている。

(2) 聖化の速度が各人によって異なる。

- ①クリスチャンになっても、罪を犯すことはありうるが、それは必然ではない。
- ②日々、キリストの奴隷としての選りを行っている人は、聖化の速度が速い。
- ③不従順な人は、神からの矯正的裁きを受ける。

(3) 努力によって聖化の速度を速めようとする、失敗する (7章の内容)。

(4) 聖化は、聖霊の働きによって可能となる (8章の内容)。